

「 伝統文化を学ぶ 」

茂山狂言会「蝸牛」茂山一門

茂山 正邦 氏

RYLA



ええ～、皆さんこんにちは、いかがでしたでしょうか。今紹介がありました通り、私も京都ローターアクトクラブに在席しております、いろいろ活動させて頂きましたが、RYLAの方へは一回も参加していなかったとかその機会がなかったのか、どういことをされていたのかは良く分からないんですけどね。多分皆さん、もうお食事も終わられたんですね。当然、もう眠たい頃やと思います。一時半くらい時間がありますので頑張ってお付き合いいただければ有難いです！

古典芸能の体験ということで、これから狂言というのを見ていただく訳なんですけれども、その前に私が少し狂言とはどういうものかということをお試しさせて頂いて、そのあとワークショップで体験学習ということでこの舞台の上に何人かの方に上がっていただき、実際に狂言の演技、また演出というものを体験していただいた上で最後に「蝸牛」という狂言を見ていただきます。皆さんどうですかね、今までに狂言というのを見たことがある人はいますか。それもナマの舞台を見られた方、おられますでしょうかね。手を挙げてみて下さい。オ～、有難うございます。結構おられますますね。結構おられますけど、まあ一割ぐらいですかね。9割の方は今日初めてご覧になりますんで簡単に先にお話しさせて頂きたいと思えますけれど、狂言というのは簡単に言いますと、今から650年くらい昔ですね、時代で言いますと中世、室町時代に出来あがった日本最古のお芝居です。これを見て頂くわけなんです、こういう言い方をすると余計皆さんは何かこうやっばり古典芸能というくらいやから難しそうで古くさそうで、分かるんやろか、楽しんやろかという感じかも知れません。その前に私からひとつ代表する狂

言を代表する演技というものをひとつだけ見ていただきたいと思えます。狂言を代表する演技ですんで、良く見ていて下さい。〈狂言の笑いの所作〉

はい。以上です。今のが狂言を代表する演技なんですね。今のは何でしょう。分かりますか。分かった人、手を上げてみて下さい。その通りです。笑ってみました。狂言の笑い方で笑って見ました。何故笑うという演技が代表する演技なのかと言いますと狂言というのは喜劇なんですね。喜劇と聞かれると皆さん吉本新喜劇とか松竹新喜劇とかを思い浮かべられるんじゃないかと思えますし、よくあるコントであったり、コメディと言われるもの、あれも当然喜劇ですよ。まあそういう風に例えば吉本新喜劇と狂言、喜劇という分類に分けるなら同じジャンルに入るお芝居なんですね。

ですからね、古典芸能と言われますが、内容というのはとてもおもしろい判り易いものです。古典芸能は数々ありますが、そのうちのひとつの入り口としてとらえていただければ有難いかなと思えます。で古典芸能というのは日本にあるもののうち、代表的なものは四つ程あります。皆さん一番ご存知なのが多分、歌舞伎だと思えますんですけど歌舞伎というのは江戸時代に出来上がったお芝居ですが、まあ歌舞伎と人形浄瑠璃、文楽という言い方をした方が判り易いかも知れませんが、これが江戸時代に出来上がったものです。そこからずっと遡りまして室町時代に出来上がったものが狂言と能というお芝居があります。この能と狂言、この二つを合わしまして能楽という呼ばれ方をしておるんですが、これが室町時代に出来上がりました。この二つの芸能というのは、今の世の中、現代に至るまで同じように発展して伝わって参りまして、まあ兄弟のような感じで

伝わって来てるんですね。

皆さんは能をご存知ですか。狂言を見た方がほとんどいないんで能を見た方も少ないと思うんですけど能と狂言、同じ時代に発生しているんですね。元々是一緒の芸能なんです。奈良時代くらいに遡りますと猿楽という芸能があるんですね。この猿楽というのはどういうものかと言いますと、この猿楽からもうひとつ遡りますと、山楽という芸能があります。この山楽という芸能は日本の農村とかに土着していた芸能ですね。いわゆる村祭りとか神社仏閣のお祭りなんかで集まって演技したり、参詣されている方に楽しんでもらう芸能として起こったんですけどね。そこに中国の方から第二次仏教伝来の時にいろんな芸能が伝わって来るんですね。その中に手品とか大道芸能と言われるものとか、寸劇と言われるものが幾つか一緒に伝わって来たんですが、そういうものも融合いたしまして各地の農村なんかに土着して行くんですね。それが猿楽と呼ばれ村祭りなどで演じられるというようなものへ発展して行っただけです。そこに元々日本の昔から伝わっている謡いとか舞い“くせうた”とか“駿河うた”とかいうものがありますが、そういうものをごちゃまぜにして、それをいろんなところで奉納といいますか演じられてみんなに楽しんでもらっていた猿楽というのがあったんです。その猿楽、日本の中で幾つかある中のひとつ“大和猿楽”奈良県で活動していた“大和猿楽”の中から観阿弥・世阿弥という親子が登場します。観阿弥ぐらいは聞いたことありますか。 “初心忘れるべからず”という言葉がありますけど、これを最初に言ったのは観阿弥さんなんですけどね、この観阿弥、世阿弥の二人の親子が登場いたしまして、ごちゃまぜの芸能猿楽というものから日本古来からある謡いとか舞いというものを抽出いたしまして、その謡いとか舞いで、ひとつのストーリーを作って話を進めて行く芸能、これを能という風に分けたんですね。

それ以外にお客さんに楽しんでもらうような面白い、こっけいなもの、また寸劇的なお芝居というものを狂言という風に、ひとつの芸能、猿楽という芸能から2つにセパレートして能と狂言という風に区別して行きました。当然発生しているところは同じですから、兄弟のように分れて伝わって来たんです。そして現代でも同じ舞台の上で、同じ日に同じ会の中で、2つのお芝居というのをやっておりますが、この能と狂言、実は性格性質はまったく正反対の芸

能なんですね。能というのは先程いいましたように謡いとか舞いをもってストーリーを進めて行く、まァ、西洋のオペラとかミュージカル的なものなんですね。

で、そして狂言というのは、逆に役者の台詞同士のやりとりで話を進めて行く、いわゆる皆さんが一般的に思われるお芝居、会話劇といわれるものなんですね。

まァこのようにして芸能の性質からしてまったく違うんですが、もっといろいろありまして、話している“話し言葉”なんか違うんですね。能の方では文語体といいまして、いわゆる文章、手紙で書く、昔の人らが手紙に書くような言葉ですね。候文といいまして、いわゆる堅苦しい言葉ですね。そういうものを使って話を進めて行くんですね。ですから今現代の人が分かり難い、何をしゃべっているのかまったく分からないと言われるのも当然なんですね。今現代ではまったく使われない手法、言葉、文章というもので一曲を進めて行きますが分かり難いといわれるのは当然なんです。それに対して狂言というのは、その当時、江戸後期町の人がしゃべっていた言葉で進めて行くというのが狂言なんです。いわゆる、口語、話し言葉で進めて行く。その様にいくつか違いがあるんですが、演技の仕方によってもいろいろ違うんです。古典芸能というものが何故難しい、分かり難いかと言うと、まず第一に演技というものが、抽象的なんですね。リアルじゃないんです。皆さんが、今、現代劇というお芝居を見られる時、例えば、テレビとかでドラマまた映画で見られる時は、そこでやっている演技というのはすべてリアルなんですね。いわゆる皆さんが日常生活でしている様なこと喜怒哀楽の分からせかたもそうですね。泣いたり笑ったり同じようなやり方で演技をして行きますね。これがリアルなんです、狂言とか能いわゆる古典芸能というのは、草創期から抽象的なんですね。私が最初笑いました。あれも、あんな笑い方をする人は今の世の中にはいないと思いますね。あんな笑い方で町を歩かれていたらかなり怖いと思います。あんな笑い方をする人はいない。でも狂言の中ではああいう風に笑うんですね。笑うだけではありません。泣いたりする演技もあります。これも今、皆さんが泣かれるような泣き方はしません。狂言の中ではこんな風に泣いてしまうんですね。

〈泣く所作をする〉

悲しそうですね。こんな風な泣き方をするのです

ね。ものすごく抽象的なんですね。抽象的と言いますが、すべて形で演技をしていくんです。

ドラマの女優さんとかが、例えば何かのシーンで泣いたりする時には悲しいことを考えて涙をポロポロと流す、そんなことをしますが、狂言とかは形で演技をする、これは楽なんですね。笑えと言われればすぐ笑えるんです。泣けといわれればすぐ泣けるんです。では実際は泣いている訳ではないんですね。楽しくて笑っている訳ではない。笑うという形でもって表現して行く。これが古典芸能の特徴なんです。ですからこの形というものを皆さん理解できれば、笑っているな、泣いているな、悲しそうなんだなということが分かるんです。

形が分からないと理解できない、何をしているのかさっぱり分からない。今ここが現代と古典芸能のものすごい大きな隔たり、一番難しい隔たりではないかと思うんですけどね。ま、こういう風にして形というもので、表現して参ります。

しかし、狂言というのはまだ分かり易いんですね、形が。今笑っている、泣いているということは、何となく分かると思います。しかし、能というのは、そういう形というものも、余分なものをそぎ落として、必要最小限度の動きで表現しようとするんですね。

狂言というのは喜劇です。能は悲劇です。ですから能の代表する演技とは泣く演技というのが代表されるんじゃないかと思うんです。ここで能の泣き方を皆さんに見て頂きたいと思います。

〈能の泣く所作〉

泣いてみました、いかがですかね。あの人固まったって思われたんじゃないかと思いますが、能では、ああいう風にして泣くんです。専門的な用語で萎り、萎るといい方をするんですが、流れ落ちる涙を手でぬぐっている様な、そういう風な感じなんですね。

逆に悲しいという気持ちを胸の中に秘めて、それでも流れるような涙を表す、そういう風な形をするんですが、いきなりあんなことされても泣いているとは分からない。その時の役者の気持ちとか登場人物の気持ちというのは、まァ歌舞劇ですんで、後でバックコーラスの人がその場合状況を歌いあげ、又、音楽でも悲しい音楽を流すんですが役者というのはこうやって泣いてるんです。分かりにくいですよ。でもこれで泣いているということをアピールしているんですね。ですからね、分かり難いとかね、言わ

れる訳なんです、これ以外にもいろんな演技方法とか、狂言を中心にですが、これから体験して頂く訳なんです、まァ、何故形、形というものが生まれて来たかと言いますと、このステージをずっと見て頂いて分かると思うんですが、ほとんど同じステージの上で狂言「蝸牛」を演じます。

皆さんがね、お芝居を見られる時、大概大道具という道具だてが作ってあるんですね。吉本新喜劇であつたら大体どこかの定食屋さんの大道具セットが作ってあつたりするんですね。すると、いわゆる緞帳という幕がすうっと上にあがりますと、お芝居が始まってなくても、あつ何かどこかの店のシーンから始まるのかな、と置いてある道具というのを見るだけで分かると思うんですが、狂言というのは一切使わないんですね。何もない舞台で私がいいろいろやります。袖へはけますと、いきなり「蝸牛」が始まります。何故道具を使わないか、大道具を使わないかという、実は使えないんですね。当然室町時代に発生しておりますので、いわゆるこういう室内、こんな大きな室内では作れません。当然マイクありません。照明ありません。ですから、どういうところで演技をしていたかと、いういわゆる神社仏閣の境内とか、またどこかの広場のような広いところで、真中に四角い舞台を作って役者が演技をするんですね。見ているお客さんというのは、そのまわりをぐるっと取り囲んで見えています、ですからあまり大きな道具は出せないんですね。役者がかくれるような、一方向からは分かって、その裏側では舞台の演技が見えることがないので、いわゆる大きい、大道具というのは、もともと出せない作りから始まっているんですね。だったらどうやって場面、状況を分かってもらうか、それは、役者が全部台詞で説明します。

狂言「蝸牛」では最初に山伏が登場しまして、私はどここの山伏で、何をしようとしています。どこどこへ行こうと思っています。まず自己紹介をすることによって、これから始まる狂言は、こういうもんだと説明するんです。当然舞台転換は、お芝居ですんで出て参ります。「蝸牛」という狂言の中では、竹藪が必要になって参ります。何とかして竹藪を役者は作りあげようとしています。こういう風にして作りあげます。「いや、何かと申すうち、はやこれに竹藪がある」。あるんですね、ここに。分かりますか、いわゆるそこにあるつもりで狂言というのは演技をして行きます。「いや何かと申すうち、はや

城下の街道へ参った」と目の前の大きな道、街道筋が出て参ります。「いや何かと申すうち、はや都に着いた」と言いますとあたり一面都、京都の町の風景が出て来ます。そういう風にしてですね何にもないことをいいことにいろいろな物を表現することによって頭の中でイメージして想像してそこに何かがあるつもりで演技をして行きます。

ですから皆さんもできたらつもりになって、何に

もない舞台の上にいるような場面、どんなんでも結構です、皆さんの頭の中で自由に想像して頂いて、何にもない舞台の上にいるようなものを作りあげて頂いて、その日の狂言というのを役者と一緒になって、作りあげて頂ければ有り難いかなと思います。

これが狂言の本当に大きな特徴なんですね。まア、その辺を皆さんに体験して頂こうかと思ひます。

〈以後、体験及び狂言「蝸牛」の上演〉

